11　次の文章は伊藤亜紗『手の倫理』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

〈北海道大〉二〇二二年度出題

　西洋哲学の文脈において触覚がどのように理解されてきたかを知るうえで、まずおさえておきたいのは、そもそも触覚が伝統的に「劣った感覚」として位置づけられてきた、ということです。

　視覚、聴覚、、味覚、触覚。人間は五つの感覚を持つと言われています。もっとも、目で見るだけでも物の質感を感じることはできますし、一部の人は音に色を感じる（共感覚）など、五つの区別はそれほど明確ではありません。ですが、その問題にはひとまずここでは立ち入らないことにしましょう。１ベンギ的に五つに分けるとして、しかし、これらは決して対等ではなかったのです。

　感覚のラルキーの最上位に位置するのは、ご想像のとおり、視覚です。視覚が優位に立つのは、私たちが視覚に頼りがちだからではなく、Ａ視覚がより精神的な感覚だと考えられたから。それぞれの感覚が持つ（と人々が考えた）特性にしたがって、ヒエラルキーが与えられていたのです。

　視覚が精神的な感覚であり、それゆえ最上位に位置すると考えられていたことは、たとえばプラトンの「イデア」論を見ればあきらかです。イデアという語はギリシャ語「イデイン」、すなわち「見る」に由来しています。認識の本質は、とりもなおさず「見る」ことにあると考えられていたのです。

　ただし、イデアを見るのは生理的な目ではありません。それは魂が霊界にいるときに見ていたものであって、体を持った人間の認識は、不完全ながらそれを想起することによって成立している、とされるのです。プラトンは逆に、２テキタイするソフィストたちを「抵抗感とか接触感とかいったものを与えてくれるものしかありはしないのだと言い張」ると、触覚に結び付けて批判しています。

　なぜ、触覚は劣っているのか。まずあげられるのは、「距離のなさ」です。視覚であれば、対象から離れているので、対象から自己を切り離して、理性的に分析したり、判断したりすることが可能です。ところが触覚にはそうした距離がない。触覚は、対象に物理的に接触することなしには、認知が成立しないのです。ゆえに自己の欲望や快不快に直結してしまう。感覚のヒエラルキーは、大きく分けて視覚と聴覚が上位、嗅覚、味覚、触覚が下位に分けられますが、この二つのグループの線引きとなっているのが、まさにこの距離の問題なのです。

　図式的にまとめるなら、視覚は人間の精神的な部分に、Ｂ触覚は逆に動物的な部分に関わる感覚である、と考えられていました。たとえば、一九世紀ドイツの哲学者フォイエルバッハは、上位の感覚と下位の感覚について、端的にこうまとめています（フォイエルバッハ自身は、触覚など下位の感覚の重要性を３ヨウゴした人物です）。

　　　触覚・嗅覚・味覚は唯物論者たちであり肉である。視覚および聴覚は観念論者たちであり精神である。眼および耳は頭脳を代表し、自余の諸感覚は腹部を代表する。（……）人間は「半分動物、半分天使」である。この動物がまさに腹部に従属した感性である。しかるに、天使たち、（……）いいかえればもっぱら空気と光りとのなかで生活し活動しているところの〈物質をもたない諸存在者〉は、眼および耳である。

　「腹部」とは「肉体的欲望」と言い換えてもいいでしょう。しそうなリンゴがなっていたら、手を伸ばしてつかみ、口に入れて食べる。目ならば「眺める」ところを、欲望にまかせて自分のものにしてしまうその動物性において、触覚やその仲間である嗅覚や味覚は「低級」とされるのです。

　一方で、この距離のなさは「リスク」を伴っています。視覚や聴覚は、対象との距離があるので、見たり聞いたりすることによってただちにをしたり死に至るということはありえません。けれども触覚、味覚、嗅覚の場合は、対象が刃物や毒だった場合には、認識することがすなわち怪我や死を意味します。認識にリスクが伴うという点は、触覚の弱さであると同時に、信頼の４キバンになる重要な特徴です。

　この「距離」の問題に加えて、触覚が視覚に劣るとされた主な理由がもう一つあります。それは、「持続性」の問題です。触覚は時間的な感覚である。これもまた、劣位を示す根拠となっていました。

　家具であれ、家であれ、視覚であれば、適切な距離のもとに全体を一瞬のうちに認識することが可能です。ところが、触覚の場合は、部分を積み重ねるような仕方でしか、対象を認識することができません。ゆえに時間がかかる。

　この触覚の部分性をあらわした５グウワが、「群盲象を評す」でしょう。大勢の人たちがそれぞれ象の体の一部を触り、「柱のようだ」「扇のようだ」などとてんでばらばらな印象を語る、というものです。もともとはインドで生まれ、仏教やイスラム教に取り入れられ、欧米にも伝わりました。ここでは西洋思想の文脈にしぼって議論を進めていますが、触覚を視覚よりも劣った感覚とみなす考え方が、非西洋社会にもあったことを示すひとつの証拠です。

　もっとも、実際には、必ずしも触覚は部分的なものではないようです。たとえば目が見えない人の中には、盲導犬の背中にふれるだけで、全身が想像できる、と言う人がいます。確かに言われてみると、目が見える／見えないにかかわらず、実際にさわっている箇所がどこであるかが分かれば、全体についての情報もかなりの程度入ってくるということに気づきます。触覚は、必ずしも「触った場所だけ」の感覚ではありません。

　ただし、このような認知ができるのは、ある程度推測が可能なとき、つまり慣れ親しんだ対象にふれるときでしょう。初めてふれるものの全体を部分の感触から理解するのは、必ずしも容易ではありません。とはいえ、触覚が常に「部分の積み重ね」であり、「時間がかかる感覚」であると考えるのは、実態に照らし合わせると、必ずしも正確な理解ではないようです。

　このように、触覚は伝統的にその「距離のなさ」や「時間がかかる」という特徴から、下級の感覚として位置付けられてきました。しかし、なかには視覚と異なる特徴を持つという点で、触覚に独自の価値を見出した哲学者もいます。触覚について論じられてきた三つめの特徴は、このポジティブな文脈から出てきたものです。

　触覚に独自の価値を見出した代表的な論者のひとりに、一八世紀フランスの哲学者コンディヤックがいます。そもそも一七世紀終わりから一八世紀にかけては、いまだかつてないほど、触覚が注目を集めた時期でした。というのも、当時、ライプニッツ、ロック、バークリ、ディドロなど時代を代表する哲学者たちが参戦した、触覚に関する有名な論争があったのです。この論争は、最初にそれを問うた人物の名をとって「モリヌー問題」と呼ばれています。

　弁護士で光学の専門家だったウィリアム・モリヌーが、ロックヘの手紙の中で提示したのは以下のような問いでした。「生まれながらの視覚障害者が、ある日手術によって視力を回復したとする。この人物は、それまで手で触って区別していた四角い物体と丸い物体を、目で見てただちに区別できるか」。モリヌーの妻は結婚後に失明しており、そのことがこうした疑問を抱くきっかけになったと考えられます。

　モリヌー問題は、ひとことで言えば、触覚のみで認識していた対象を、人は瞬時に視覚のみによって認識することが可能か、という問いです。この問いが当時の哲学者たちの関心を集めたのは、その背後に、「大陸合理論」vs.「イギリス経験論」というより大きな思想的対立があったからでした。

　大陸合理論は、人間は生まれながらにして理性を備え、球や立体といった基本的な観念を持っていると考えます。この考えに従えば、触覚を使おうが、視覚を使おうが、球や立体を認識できるはずですから、モリヌー問題への答えは「ＹＥＳ」となります。たとえばライプニッツはこちらの立場をとりました。

　これに対してイギリス経験論は、人間はタブラ・ラサ（白紙）の状態で生まれ、次第に経験のなかで知識を獲得していくのだ、と考えます。これに従うなら、生まれてから触覚で学んだのか視覚で学んだのかが重要な意味を持ちますから、モリヌー問題への答えは「ＮＯ」になります。ロックやバークリはこちらの立場をとりました。要するに、モリヌー問題は、大陸合理論の支持者とイギリス経験論の支持者がそれぞれの主張を戦わせる、６カッコウのネタになっていたのです。

　ここでは論争の詳細には立ち入りません。あえて「ネタ」という言い方をしたのは、ここでなされている議論が、実際の私たちの認知のあり方や目が見えない人の触覚の使い方とは必ずしも一致しない、あくまで哲学的な関心が先行したものだったからです。

　たとえば、自身も視覚障害者でありＵＣバークレーでをとるジョージナ・クリーグは、哲学が扱うこうした現実ばなれした視覚障害者を「７カクウの盲人」と呼んで批判しています。現実世界では匂いや音の情報ぬきの「純粋な触覚による認知」などありえないし、実験室でもないかぎり「一定の位置から動かずに見る」などということもありえない、と。

　とはいえ、各論で見ていけば、この議論のなかで触覚についての興味深い分析が見られるのも事実です。なかでもここで注目したいのは、経験論の立場をとっていたコンディヤックの指摘です。

　コンディヤックは、その『感覚論』（一七五四）のなかで、自分で自分の体のあちこちにふれるところを想定して、こう述べます。「いたるところで固さの感覚が、互いに排除しあいつつも隣接しあう二つのものを表象せしめ、そしてまたいたるところで、その感触を感じているのと同じ存在が（……）『これは私だ』、『これもまた私だ』と答えるのである」。

　つまり、私たちが自分の体にふれるとき、それは同時に「ふれられているのは私だ」という感覚をもたらします。私が私にふれるときは、私は私によってふれられてもいる。この触覚に特有の主体と客体の入れ替え可能性を、ここではＣ触覚の「対称性」と呼びたいと思います。

　この対称性は、その後、二〇世紀にメルロ＝ポンティが好んでとりあげたことでも知られています。注意しなければならないのは、私は主体でも客体でもありうるけれど、同時に主体でありかつ客体であることはできない、ということです。「仮に私の左手が右手に触れ、そしてふと、触わりつつある左手の作業を右手で捉えようとしたとしても、身体の身体自身に対するこの反省は、きまって最後には失敗する。私が右手で左手を感ずるやいなや、それに比例して、私は左手で右手に触わることを止めてしまうからである」。

　興味深いのは、コンディヤックにとって、この対称性が「体をもった物理的な存在としての私の発見」という形で経験されていることです。私が、単なる精神ではなく、固有の空間を占める物体として世界に存在していること。このことは、裏を返せば、私が体として存在していることは、「発見」されなければならないほど、ときに曖昧になりうるものなのだ、ということを示しています。触覚は、そのような曖昧さのなかにある私に、明確な輪郭を与えてくれます。触覚は、「魂を自己の外へと脱出させる感覚」なのです。

　もっとも、コンディヤックにとっての体の発見は、体がないと仮定するところから思考を進める思弁的な操作の一段階でした。しかし実際に、私たちは自分の体の輪郭を見失うということがありえるのではないでしょうか。そして、そこからの復活にやはり触覚が重要な役割を果たします。

注　ヒエラルキー――ピラミッド形の階層組織。上下関係によって序列化された階級秩序。

問１　傍線部１～７のカタカナを漢字に改めよ。

問２　傍線部Ａ「視覚がより精神的な感覚だと考えられた」とあるが、それはなぜか。四〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「触覚は逆に動物的な部分に関わる感覚である」のはなぜか。五〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部Ｃ「触覚の『対称性』」とはどのような性質を指しているか。七〇字以内で説明せよ。

◎ 問５　「触覚」を筆者はどのようなものと考えているか。本論の論旨を踏まえて一〇〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　１＝便宜　　　　２＝敵対　　３＝擁護　　４＝基盤　　５＝寓話

　　　６＝格（恰）好　　７＝架空

問２　Ａ視覚は対象を自己から切り離して Ｂ理性的に分析し、判断できる Ｃ認識の本質とされたから。（40字）

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝３〔「対象から離れている」という内容があれば可。〕

Ｂ＝４〔「理性的に」は必須。「分析」「判断」のどちらかが欠けている場合は減点２。〕

Ｃ＝３〔「認識の本質」という内容があれば可。〕

問３　Ａ触覚は、対象に物理的に接触しなければ認知できず、Ｂ自己の欲望や快不快といった Ｃ肉体的欲望に直結するから。（50字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４〔「触覚は物理的接触によって対象を認知する」という内容であれば可。〕

Ｂ＝３〔「快不快」という内容は必須。「自己の欲望」がなければ減点１。〕

Ｃ＝３〔「肉体的欲望」は必須。〕

問４　Ａ自身の身体にふれるとき、Ｂふれる主体とふれられる客体とに同時にはなれないが、Ｃふれる主体とふれられる客体とは常に入れ替え可能だという性質。（67字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「自身」は「自分」「私」でも可。〕

Ｂ＝３〔「主体であり、客体であることが同時には成立しない」という内容であれば可。〕

Ｃ＝５〔「主体と客体とは入れ替え可能」という内容は必須。「私は主体でも客体でもありうる」という表現でも可。「自身の身体にふれる、ふれられる」という説明がなければ減点２。〕

問５　Ａ触覚は、対象との距離がなく、Ｂ対象全体の認識に時間がかかるので、Ｃ視覚に比べ動物的で下級とされてきたが、Ｄ見失っていた物理的存在としての自己を触覚の対称性によって再発見させることのできる感覚である。（96字）

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「触覚は物理的接触によって対象を認知する」という内容でも可。〕

Ｂ＝２〔「持続性」という表現だけでは不可。「時間的な感覚」「部分を積み重ねる感覚」という表現の場合は減点１。〕

Ｃ＝２〔「視覚に比べ…下級」は必須。「動物的」という表現がなければ減点１。〕

Ｄ＝４〔「固有の空間を占める物体としての私の発見」という内容は必須。「触覚の対称性によって」「主体と客体が入れ替え可能という触覚の性質によって」という内容がなければ減点２。「自己を再発見させる」は「私の身体を発見させる」という内容でも可。〕